

# 自己理解・アイデンティティ・居場所

小 沢 一 仁\*

## Self-understanding・Identity・"Ibasyo"-a place in a society

Kazuhito OZAWA

The purpose of this study was to understand the concept of Identity. Understanding the concept of Identity for self-understanding, it was pointed out that Identity was "I" was "Me." What is "I" and what is "me?". It pointed that "I" was the heart, the soul of a person and "me" was the physical person, with all of one's environment, personality, limits, destiny, and potentials that lay within. And a person had some "ibasyo"-places in a society". It was discussed that in the places in a society he or she had a sense of identity.

### 第1章 自己理解の問題—研究の出発点

#### 1. 心理学を学ぶ動機と研究の目的と方向

##### (1) 心理学を学ぶ動機を振り返る

筆者は、これまで、アイデンティティ概念を明確化して捉え直そうとする作業を行ってきた(小沢, 1996等)。アイデンティティという言葉、筆者自身にも納得できるように、他の研究者にも共通理解が得られるように、そして、講義の際の学生にもわかりやすく、提示したいがためである。

筆者の個人的な心理学を学び始めた動機を振り返れば、自分自身を知りたいという思いからであった。さらに、自分自身に対するしっくりこなさの感覚、言い換えれば、自分自身に対するつかみ所のなさの実感をなんとかかしたいと思いがあった(これは、学生においても、彼ら自身がつもつ思いではないか)。そして、アイデンティティなる概念に出会い、これを研究のテーマとしようと考え、心理学の世界に入ってきたのである。そして、自らのアイデンティティ研究をいかなる方向へ進めて

いくかということを検討しようとした際に、自らの心理学を学び始めた動機を振り返る必要性が生じたのである(小沢, 1996)。

なぜ、動機を振り返る必要性が生じたかといえ、アイデンティティ概念自体を捉え直す試みの中での軌道修正が必要になったからである。筆者はこれまで、アイデンティティ概念を自分の研究のテーマとして選択して以来、日本語にはない、アイデンティティという用語はいかにして捉えたらいいかについてを課題にしてきた。

筆者は、まずはじめはアイデンティティを、「居場所」と「物語」という表現で捉え直そうと試みた(小沢, 1992等)。それは、日本語にはないアイデンティティという言葉に近い日本語は何かと考えた。そして、エリクソンによる適所(Erikson, 1959)という記述や、自らのことを確認する事例に接して(小沢, 1992)、アイデンティティ概念を捉え直すヒントとしたのである。学会発表の場や研究会で議論を繰り返す中で、アイデンティティを居場所と物語と捉え直すことの意義は何か、また、アイデンティティが他の概念を異なるのは何なのか、という意見を受けて、まさに、アイデンティティ概念についての再考を迫られたのである(小

\* 東京工芸大学工学部基礎・教養講師  
2000年10月2日 受理

沢,1997,1998).

それは、常に他の研究者から、折に触れて、問われる。アイデンティティ研究を提示する際に、アイデンティティ領域以外の研究者から、幾たびも、アイデンティティとは一体なんですか、という疑問が提示された。

そこでは、自らが、このアイデンティティ概念に対する、心情的な側面での共感と、論理的に理解する上での違和感が、筆者の心の中に錯綜していた。そして、アイデンティティをまともに問う、という研究者としては当然であるが、しかし、自らの限界におののく課題について、自覚的に取り組む際に、自分のアイデンティティを捉える視点を明らかにしようと考え、心理学を学び始めた動機を振り返ったのであった。

## (2) 研究の目的と方向性

心理学を学び始める動機とは、心理学という学問を、学ぼうと志す時に、何を目指しているか、である。一見、動機と実際の研究という営みとは、直接には関係ないようにみえる。

それぞれの研究には、それぞれ研究の目的がある。その目的のさらに先に、その研究で何を指していかという方向性がある。研究の方向性とは、研究の目的のさらに先にあるものを示すものである。その研究の方向性が誤っていれば、研究の目的も歪んだものとなる危険性がある。つまり、研究の射程範囲の中で目指すものが、研究の目的であり、その射程範囲以外のその先において、目指すものが研究の方向性であるといえる。

では、いかにして研究の目的の先にある方向性を確認するか。その手段のひとつとして考えられることが、心理学を学び始めた動機、研究を始めた動機を明らかにすることである。それぞれ人は、心理学を学ぼうとするときに、そして、心理学の研究をしようとするときに、こういうことを知りたい、明らかにしたいという思いをもつそれが心理学を学ぶ動機である。その動機は、自分これから学んでいく心理学から、そして自分が行っていく研究から何を得たいかという思いが込められている。その動機は、先に示した研究の方向性と、近い関係にあるのではないか。研究から何を

得たいか、心理学を学ぶ中で何を得たいか、という思いが込められた動機は、研究の目的の先にある、研究の方向性と類似したものではないか。

場合によっては、心理学を学び始めた動機とは、異なる方向性の研究の目的を持つこともあるだろう。その際には、自らが心理学に求めるもの、研究に求めるものという動機が、どのように、変わってきたのかを確認する必要があるだろう。

このように、動機を振り返り自覚することは、研究の目的、さらには、研究の方向性を確認することにつながると考えられる。そして、冒頭に示したような自分自身を知りたい、自己理解という心理学を学ぶ動機を、研究の方向性として設定できないだろうか。以下に、その可能性について議論していく。

## 2. 大村による血液型性格判断批判から見る自己理解

例えば、血液型性格判断も自己理解の一つのあり方である。私はこういう性格の特徴を持っている。それは、私の血液型が何々型であるからである、と。心理学の実証的研究においては、血液型と性格特徴の関連は数々の研究において、否定されている(大村,1990)。つまり、血液型と性格の関連はなく、一般的に信じられている、あなたがこういう性格なのは、血液型のためであるという指摘は、誤りであり、それを信じてしまい、私がこういう性格なのは、私の血液型のためであるという考えも、思いこみに過ぎないということである。

しかし、この血液型性格判断は、一般に根強く浸透している。筆者が心理学を講義し始めてから、10数年経つが相変わらず、折りにふれ、学生にいかにか当てにならないかを話さざるを得ない状況である。なぜ、このような、いわゆるインチキな性格判断が、広まり根強く残り続けているのだろうか。大村は、第二次大戦前に、古川という当時の医者が血液型性格判断を提唱したと述べている。そして、医学界で否定され、消えたものが、現在広まっているのは、そのリバイバルであるという。大村によると、この血液型判断で用いられる、性

格記述はとて、よく作ってあるものであり、多くの日本人の特徴を捉えているものである。さらに人は、他者から「あなたは、こういう人ですね」と言われると思いきみやすい傾向があり、しかも、一度信じるとその思いきみが消えない傾向があるために、インチキなるものであるが、浸透しているとしている。

それぞれの個人にとって、私がある血液型であることと、私がある性格特徴を持つことは、それぞれ確信されることである。血液型は、けがや病気や健康診断、献血などの際に機会あるごとに、知らされる。また、日常生活を生きていく上で、自分の性格特徴については、誰しもが考えることである。そこで、血液型と性格記述の両方がそれぞれ実感されているのである。そして、血液については、血という赤い神秘で生命の根元的なものへの怖れがあるのではないか。さらに、大村のように、性格記述はとて適格な—それだけで性格検査を作れるくらいのものである。そうして、その両者の血液型と性格記述を結びつけるところに、問題があり、しかし、自己理解もある。つまり、自分がこういう性格なのは、自分の血液型のせいなのだ、と、考え、それで納得してしまうのであると考えられる(図1.参照)。

### 3. 自己理解の背景にあるもの

以上のように、血液型性格判断を見ると、血液

型性格判断における自己理解とは、第一に、自分という人間についての性格記述がある。例えば、自分は、A型は几帳面な性格だとか、B型はマイペースだとか、O型はおおらかだとか、AB型は二重人格だというものである。第二に、なぜ、自分は何々の性格特徴を持つかという理由を示すものである。つまり、私が何々という性格であるのは、この血液型だからというように、自分の性格記述とその理由をとて示される。

血液型性格判断でみたように、「あなたはこれこれこういう性格特徴がある」と言われ、「はいそうです」と、思った場合、「それはあなたがこの血液型のためですよ」という信頼の置けない理由であってもその理由を信じてしまうのである。つまり、人は、信憑性に疑いがあったとしても、それを問い直したり確かめたり検討したりすることなく、「これこれこうですよ」という内容を信じてしまう傾向があるということである。このことから、考えられることは、人は「なぜ、私はこういう性格なのか」という理由を求めている、欲しているということである。

そこで、問題は、人は、自分の性格特徴だけでなく、「なぜ、私はこういう性格なのか」という理由を求めるのか、である。

それは、自己理解、つまり自分についての説明を欲し自分自身を知りたいという思う、その思いの根底にあるものを問うてみる作業で明ら

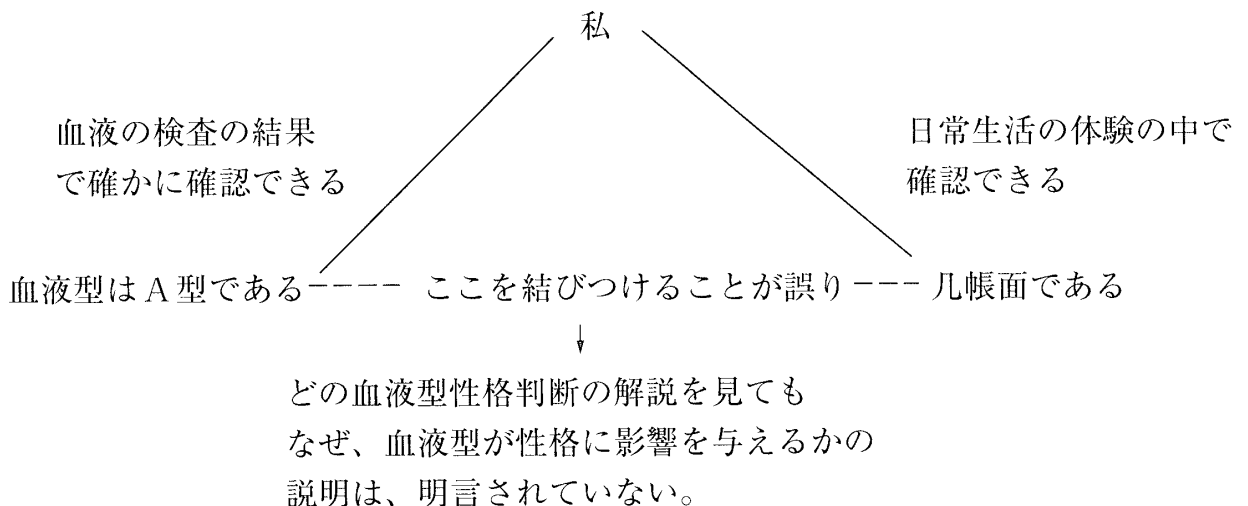


図1. 血液型性格判断の誤り

かになる。

例えば、自分以外の他人の特定の人物のことを我々は知りたいと思うときがある。それが、親であれ、きょうだいであれ、子どもであれ、友人であれ、異性であれ、等々。誰かはともかく、自分にとって気になる、言い換えれば、重要な人物であるからである。自分にとって重要な人物でなければ、気にもならず、知ろうという気にもならないだろう。同様に、自分が、自分自身を知りたいと、思うことも、自分にとって、自分自身が気になる存在であり、重要な人物だからであるといえる。

このように、自分が自分自身にとって、重要な人物ということは、いったいどういうことだろうか。それは、自分が、この自分という人間として生きているからである。自分は、この自分として生きている。男であれ、女であれ、様々な特徴を持つ自分として生きている。だからこそ、この私という人間で生きている私自身のことを、しっかりと納得していたい。つまり、こうして生きている私自身のことをもっと納得して生きていきたいという思いが、自分とは何かを知ろうとする人の気持ちの根底にあるのではないかと考える。こうして生きている自分自身について、「納得できない、こんな自分でもいいのか」という気持ちがあると、その自分に対する不全感や納得のいかなさがあると、自分のことをもっと知りたい、一体自分はどのような人間なのか、とか、こういう自分の性格はどこから来るのか、という理由を求める思いが生じるのではないかと考えられるのである。

自分自身をしっかりと納得して生きていきたいという

気持ちのことを、ここでは、自己理解に対して、自己把握と呼ぶ。この自己把握への思いは、自己理解への思いの根底にあると考えられる(図2.参照)。

#### 4. 研究の方向性と動機

以上の血液型性格判断で見たように、心理学を学ぶ動機そして研究を行う動機においても、自己理解への思いがあり、その根底には、自己把握への思いがあるのではないかと。

では、自己理解および自己把握は、研究の方向性として、妥当なものだろうか。青年心理学の領域においては、西平(1970)および落合(1993)が研究対象である青年の自己理解を深めることの重要性を指摘している。

個人におけるものと、研究におけるものと、その両者の自己理解と自己把握ではいかなる違いがあるか。それは、公共性である。自己理解と自己把握は、常に個人において行われるものである。それを研究という公共性のある営みにおいて扱う場合、個人の枠だけには留まらず、他の個人にも共通するものを酌み取ってくるが必要とされる。研究とは、公共性のあるものであり、その目的は、共通性のあるものをいかに提示するかにある。問題は第一に、それぞれの個人から共通性のあるものをいかにして酌み取るかである。やまだ(1976)のモデルという言葉を使えば、個人の自己理解および自己把握を示すデータから、いかに他の個人についても共通性のあるモデルを構成するかである。

佐伯(1986)は、心理学研究を「面白くする」、つ

自分のことを知りたい・・・自己理解への思い



こうして生きている  
自分自身を納得して・・・自己把握への思い  
生きていきたい

図2. 自己理解への思いの根底にある自己把握への思い

まり、意義あるものとするために、研究の成果を日常の用語に捉え直すことを提言している。この提言は、共通性を求めるあまりに、個人や個人の生活とはあまりに乖離してしまっている研究の成果の危険性を述べているものであり、いかにして、日常生活に研究の成果を引き戻したらいいかという指摘である。このように、第二の問題は、個人の営みである自己理解および自己把握において、研究の目的として共通性のあるものを酌み取った後に、研究の方向性として設定した、個人の自己理解と自己把握にいかに寄与できるかである。研究の成果を個人にもどした場合、何が寄与できるかである。

## 第2章 アイデンティティ概念の明確化

### 1. アイデンティティという概念の理解

#### (1) 身分証明書を忘れたという事例

西平直 (1993) は、身分証明書を例にアイデンティティを考察している。ここでは、身近な具体例をもとに考えていく。ある人が、必要が生じ口座を開設する必要があるが生じた。そこで、近所の郵便局に行った。彼は、どこにすんでいる誰であるかを名乗り、口座を開設したいと言った。しかし、受付の係員は、身分を証明するものをもっていませんか、と言う。たまたま、そのとき彼は身分証明書を持っていなかったのである。それで、「今は持っていないが、確かに、私はどこの誰である」と言ったのである。受付の係員は、身分証明書がないと口座が開けないと言う。彼は、「本人がここにいるのだから、いいのではないか、誰が証明する必要もなく、また、身分証明書が必要であるわけもなく、本人がここにそういつているのだから、それでいいのではないか」と怒りを込めて、そんなお役所対応をしなくてもいいじゃないかという雰囲気を与えつつ、食い下がったのである。係員は、おそらく上司であろう者に相談していたが、その上司であろう者は、「規則だからということで、開設できない」と言う。「なんと、ここに自分がいるのに、自分を証明するものがないだけのこと、口座が開設できないとは、なんとひどいこ

とだ」と憤慨までして彼は帰っていった。

#### (2) アイデンティティという言葉自体とアイデンティティ・カード (Identity Card : 身分証明書)

そもそもアイデンティティという言葉自体の意味するところは、「あるもの」と「あるもの」が「同じ、同一である、イコールである」ということである。単純には、 $1+1$  と  $2$  は、同じであり、イコールで結ぶことができる。この「何か」と「何か」が同一である、同じであることが、アイデンティティという言葉自体の意味である。

さらに、アイデンティティカードつまり、身分証明書において、アイデンティティという言葉が用いられている。それは、ここにいる人が、どこの誰かであるか、第三者に証明するためのものである。

日常生活を送る中で、身分証明書が必要になるときは、特別な場合である。例えば、旅行などで海外にでるときは、パスポートが必要である。私がどこの誰であるかを示すものがなければ、出国ができないし、入国もできない。また、大学における定期試験においても、学生証が必要となる。これは、いわゆる替え玉受験を防止するためである。さらには、先に見たように、銀行、郵便局等で、免許証などの身分証明書が必要となる場合がある。

アイデンティティカードにおいては、ここにいる私という人間が、あるところに生まれてあるところに住みこれこれという名前の人間であること、つまり、イコールであることを、第三者に対して証明するものである。本人にしてみれば、ここにいる私という人間が、あるところに生まれてあるところに住みこれこれという名前の人間であることは、確信しており、疑いようがないことである。しかし、本人がいくら主張しても何も証明するものがない場合は、第三者からしてみればその本人の言い分が正しいかどうかを確認することはできないのである。

何かと何かイコールであることを示すことが、アイデンティティという言葉の意味であるが、それは、何かと何か、異なっている可能性がある

るからこそ、イコールであることが問題になるのである。西平直(1993)は、アイデンティティにおいては、「ズレ」が問題になると述べている。つまり、「何か」と「何か」において、ズレがあるからこそ、「何か」と「何か」がイコールであることが問題になるのである。

### (3) エリクソンによる記述から

エリクソンは、アイデンティティ自体については明確に示していないが、アイデンティティの感覚については、自らの空間的斉一性と時間的連続性についての自他承認の感覚と示している(Erikson,1959)。つまり、「あのときあそこでの自分」と「このときここでの自分」が、同じであるということ、自分でも認めることができるし、他者からの承認されていると感ずることができるという感覚のことを示しているといえる。

つまり「今ここにいる自分」と、「過去またはある状況における自分」とが、同じであるかどうかの問題である。過去のあるときあるところにおける自分は、それは、そのときその状況における自分の体験を示していると考えられるが、その体験を、現在においてここにいる自分との、一致および連続性を持つことができないという感覚は、言うなれば、過去の自分の体験を今の自分が受け入れることができないことを示している。さらには、今の自分の状況において、あるところにおける自分、例えば、ある状況、家庭であったり、職場であったり、ある他者と接しているときであったり、そういう自分が、今ここにて振り返っている自分にとって受け入れられるかどうかという、問題である。

ここで、斉一性と連続性をアイデンティティとして捉えると、何と何が、斉一性があり、連続性があることが問題になっているかという、一つの項は、「今ここにいる自分」であり、もう一つの項は、「過去のあるときある状況における自分」または「現在のある状況における自分」である。つまり、「今ここにいる自分」があつてこそ、この今ここにいる自分にとって受け入れられるかどうか問題にされるものと考えられることができる。

### (4) 前者の自分と後者の自分

さて、このように、エリクソンにおけるアイデンティティの記述にある、斉一性と連続性を考えてきたが、一つの項である、「今ここにいる自分」とは、いったいどのように考えられるか。筆者はそれは、ジェイムスの主我つまり、エリクソンのいう意識における私であると考えた(小沢, 1997等)。つまり、こうして考え思っている、見つめる主体としての自分のこと、さらには、私という人間の心・魂という側面のことである。

では、次に、もう一つの項はどのように考えることができるだろうか。概念としては、前者の見つめる自分に対して、見つめられる自分であるから、前者が極めて点のような、否、点にもならないような、主体として意識として、見つめる視点の発信地としての自分を指していたことに対して、後者の自分とは、極めて多面的で大きな枠組みにおいて自分を示すものとして捉えられる。エリクソンは、人間を、身体的・心理的・社会的存在として捉えている(Erikson,1959)が、人間の身体的側面、心理的側面、自分の持つ性格特徴や願望など、社会的側面、対人関係の中での自分やある状況における自分など、多面的な自分の様々な側面を含み、かつ、時間的な流れの中での自分、つまり、誕生から様々な体験を積んできた自分、未来において様々なことが予想されるであろう自分も含んでいると考えられる。また、西平は、アイデンティティ概念を、統一性、包括性かつ全体性をもつ概念として捉えている(1970)。ここで見てきたように、後者の自分はまさに、自分におけるすべての側面を含む、自分という人間全体を視野に入れたものであるといえる。筆者は、このような前者の自分、私と、後者の自分、私と同じであること、つまり、「自分が自分であること」、「私が私であること」が、アイデンティティであると捉え直した(小沢, 1997, 1998)。

先に示したような、自分が自分であること、私私であることは、たった一人の唯一な存在である。これまで、小此木によって、アイデンティティ概念には、自分の生まれ、自分がどのような国

籍として、民族として生まれたかという、宿命的な側面があるという指摘がおこなわれ、さらに「男性、女性としての生物学的な自分をはじめ、この親、この家庭、この階級、この地方に生まれた自分といった運命的なものすべてを、自らのアイデンティティとしていかに受容し、価値あるものたらしめるか、自ら選んだ主体的なものに転換することができるか。エリクソンが私たち一人一人に問うのは、まさにこの課題である。」と述べられている(小此木, 1978)。また、西平(1999)においても、神谷美恵子についての伝記分析によって、彼女のハンセン氏病患者に対する思いとして「なぜわたしではなく彼らであったのか?」という問いかけを指摘している。

これらの指摘は、このように生まれ生きているたった一人の人間で、自分があることは、現実の世界における、いかなる説明によっても述べることはできないものであり、それは、宿命としか言うことができないものであることを示している。

たった一人の存在として、この時代に、この国に、この地域に、この親の元に、このきょうだい家族の下に、この身体に、男として女としてこの性として、様々な才能や能力の可能性と限界を持つ人間として、生まれたのはなぜか。それは、宿命としか言えないものである。

筆者はかつて、親に対する子どもの反抗を考察した際に、子どもの親への反抗の根底に、「なぜ自分はこの親の子として生まれてきたか」という宿命に対する問いかけがあると述べた(小沢, 1998)。そこで、子どもの側の「なぜ自分はこの親の子として生まれてきたか」という問いに対して、親の側の「なぜ自分はこの子どもの親であるのか」という問いに対して、「縁」という言葉で、答えてきた文化があると考えた。さらに、この縁という言葉は、親と子の関係だけを指すのではなく、様々な出会いにも、用いられるものである。そして、さらに、先に考察した、自分がこの人間として生まれた宿命に対しても用いることができるものではないかと考えられる。つまり、自分が自分という人間で生まれ生きていることの宿命をも、縁という言葉で表すことができると考えられるのであ

る(小沢, 1998)。

### (5) このような捉え直しの意義

以上のようにアイデンティティを、自分が自分であること、私が私であることと捉えることの意義を考えると、まずアイデンティティにまつわるズレの対立項を、「個人」対「社会」でなく、個人内における、「見つめる自分」対「見つめられる自分」と捉えたことにある。この見方では、社会・他者の問題は、見つめられる自分、つまり、こうして生きている私に、含まれる。そして、自分を厳しく、問う点を強調することで、本来のアイデンティティが問題になる根源的な側面を明らかにできると考えられる。しかし、その反面、宿命にまで問題にしなければならなくなり、これは開けない方がよい「パンドラの箱」が含む問題をはらんでいる。これは、宗教にまで関わるもの、さらには、研究者でもあるが、ひとりの人間としての私自身が問題となるものであるが、筆者は次章で見るような解決の方向を探りたい。

## 第3章 居場所一何によってアイデンティティー—私が私であること—を確認するか

### 1. アイデンティティ危機

#### (1) 臨床概念から発達概念への転用

エリクソンがアイデンティティという用語を使い始めたのは、(Erikson, 1968)。「自分が誰かわからない」と語る第二次世界大戦に従軍した退役軍人の治療からという。そして、彼らの状態をアイデンティティがない状態、アイデンティティが危機に陥っている状態と表現したのである。最初は、このように戦争等の危機的体験をした者や境界例等の事例を対象にした、いわゆる臨床概念であったアイデンティティ危機を、その後、発達概念として転用し、青年期における諸変化の故に生じる発達の危機として、捉えるようになった。つまり、青年期において、いろんな変化(青年期における身体・心理・対人関係・状況の変化等)を体験すると、「私は、私がいったい誰か、わからない」

(私=?)とか、「私は、こんな私では嫌だ。」(私≠私)という思いをもつことがある。このような、青年期における諸変化を体験し、私が、私自身のことを、納得して受け容れられない葛藤をもってしまった状態を、「アイデンティティ危機：Identity Crisis」としたのである。

## (2) 自己定義によって、アイデンティティ危機が解決できるか

私が私ではないと感じられる状態、私はこんな私ではいやだと感じられる状態、これらのアイデンティティ危機の状態から、いかにして、アイデンティティを取り戻すか。

私は私ではない、という言い方の反対である、これが私であるという、私のあるべき姿を明確にして持つこと、言い換えると、私とは、何々という人間であるという、自分に対する定義を行うことによって、アイデンティティ危機の状態から、脱することが出来るだろうか。しかし、エリクソンは、アイデンティティは自己定義ではないと述べている(1967)。アイデンティティを私が私であることと捉えると、自己定義の面があることは確かだと考えられる。しかし、私はこれこれの人間であるという言葉による自己定義だけによって、自らのアイデンティティー私が私であることーは確認し得ないのではないか。これはなぜか。

つまり、私はどういう人間か?という問いに対して、意識として言語化した形で答えを出していくことは、青年期が知性化の時期であるゆえに、ありうべき方法である。しかし、生活の中で、生きていく中で、感じたアイデンティティ危機は、知性化による言語化という回答だけでは、解決されない。生活の中で、生きていくこと自体において変化が起こらなければ、単なる防衛機制に終わってしまう。つまり、言葉による自己定義だけでなく、生活の中で生きている自分自身に変化が生じなければ、実感としてアイデンティティの自覚を得ることは難しいだろう。では、何によって得られるか。

## 2. アイデンティティの感覚が得られる適所

### (1) エリクソンの記述

筆者が、居場所という見方に注目したのは、エリクソンの記述からである。エリクソンは、小説家のバーナードショーの言葉を次のように引用している。「たしかなのは、すべての人間は、自分の可能性を実現し、その影響を他者に及ぼすまでは社会の中でかりそめの位置しか得られない。・・・すべての人は、自分の生まれより上であろうと下であろうと、自分にとってふさわしい場所(natural place)を見つけるまでは、心安らかにはなれない。(Erikson, 1959)」ここでは、ふさわしい場所という言葉で示されているが、まさに、日本語でいうところの自分にとってまさに適した、居場所を見つけることを示している。この引用から、居場所というものは、自分の可能性を実現して、それを他者に認めて貰うことまたは認めさせることによって、得られるものであるということができる。

さらに、別のエリクソンの記述から、青年期における居場所について、アイデンティティの感覚との関連を見てみよう。「青年は、自由な役割実験を通して、社会の中に、適所(niche)を発見する。・・・この適所を発見する中で、青年は、内的な連続性と社会的な斉一性の確かな感覚を得るのである。」エリクソンはここで、適所、言い換えれば、居場所を得ることによって、アイデンティティの感覚を持つことができると述べている。

### (2) 居場所という見方ーアイデンティティ研究の一領域としての居場所

先に、自分が自分であることがアイデンティティであると捉えた。そして、後者の生きているすべての側面を含む自分を、意識としての自分が見つめた際に、納得できるか受け入れられるか、確信することができるかということが、アイデンティティにおいて問われていると考察した。さて、その際に、生きているすべての側面を含む自分の中で通常人間はあるいくつかの側面において、自分自身を問題にし、その自分でいいかどうかの判



断を行う。つまり、自分自身のすべての面を考慮して自分はこれでよいかどうかという判断を行うわけではない。言い換えれば、自分にとっての重要な側面があるということである。例えば、ジェンダーアイデンティティ(gender identity)という言葉や、民族アイデンティティ(ethnic identity)という言葉があるが、これらは、自分が男性であるということ、または、女性であるということ、ある民族の一員として産まれたということ、それらの自分の側面について、自分が納得して受け入れられるかどうかについて葛藤が生じており、自分がいかなる男性として、女性として、この民族の一員として生きていくかというアイデンティティ危機、つまり自分がそういう自分であることについての問題が生じているのである。アイデンティティ研究は、様々な領域においてなされているが、それは、様々なアイデンティティ危機が生じる領域の分だけ、アイデンティティ研究があるといえる。

このように、アイデンティティ研究は、人間において様々な側面においてなされているのであるが、筆者はいかなる側面からアイデンティティ研究を行おうとしているかといえば、居場所という側面である。言い換えれば、居場所も、生きていく人間における一つの側面に過ぎない。であるが、居場所は、日本語にもともとあり、日常生活を生きる上でも、意識することが多い言葉である。この意識することが多いということは、例えば、「大学に居場所がない」「家庭に居場所がある」などと、研究者側で創設した概念ではなく、人間が生活する中で、意識して思うことがあるものという利点がある。

人は、生活する中で、自分を振り返る際に、居場所という言葉を用いる。これは、自分の生活についての判断、評価する際に用いられる。ある状況が、自分にとって、生き生きするものであるときには、「そこには居場所がある」と思える。逆に、自分にとって苦しい状況においては、「自分には居場所がない」と感じる。このように、「居場所がある」または、「居場所がない」という叙述は、自分が生活を送る様々な場面において、自分がどれだ

け生き生きとしていられるかどうかの指標と、自分にとって意味や意義を見いだせるかどうかの指標となっている。この生き生きとしていられるということは、その場面における自分を納得できる、受け入れられるということを示しており、つまりは、自分が、その場面における自分であることを納得できる、確信することができること、アイデンティティ(の感覚)を持つことができることを示している。

言い換えれば、アイデンティティ危機において、発露される叙述においては、「私は誰かわからない」「こんな私は嫌だ」というものがあるが、これらは、「この居場所においては、私は自分ではないように思える」とか、「この居場所における私は、自分では嫌いだ」という表明として捉えることができる。

### 3. 居場所の概念化

#### (1) 居場所の数と自覚

ここでは、筆者が実際に面接調査において、居場所を提示する際の概念的枠組みを検討するが、これはあくまでも仮説であり、今後の調査によって修正すべきものである。

ひとりの人間において、いくつの居場所があるか、ひとりの人間はいくつの居場所を持つかということを考えると、おそらく10個以内であると考えられる。多くの人々は、5個以内ではないか。つまり、居場所とは、一つの人間にとって、数え切れないくらい多くのもを持っているわけではないと推測される。さらには、自分の居場所については、人は自覚的に意識して、捉えている。これは、居場所という見方をする上で重要な点である。それぞれの居場所における、自分にとっての生き生きとした感じの度合いや、その逆の葛藤の度合いについては、様々な印象はあるだろう。しかし、人は自分の生活の中での居場所については、いくつあるかということについて把握できていると考えられる。逆に言えば、無意識という言葉を使えば、自分の生活の中には、自分の知らない自分の居場所というものは、決してない。人にとって、自分の持っているそれぞれの居場所は、すべて意

識の中で捉えられているものである。試みに、居場所を例示してみる（図3. 参照）。

## (2) 居場所の構成

人はいくつかの居場所をもつと考えられるが、それでは、それぞれの居場所はどのような構成をしているのだろうか。筆者は、これまで居場所を三角形の基本形として想定してきた(小沢,1997)。一つの角は、マーシャによるアイデンティティステイタスの基準の一つである、コミットメントを考慮し、人が何に打ち込んでいるかという「対象」である。二つ目の角は、エリクソン、ブロス、サリバンらの指摘する重要な他者の発達的变化を考慮したその居場所における重要な「他者」である。

このような一つの居場所において、本人(自分)と打ち込む対象と他者を含む三角形をなしていると考えられる（図4. 参照）。さらに、図3. に示したように、このような三角形をなす居場所を人はいくつか持ち、全体として、居場所の総体としてのゲシュタルトをなしていると考えられる。

## (3) モンスターに見るアイデンティティ危機と危機克服の試み

たとえば、メアリ・シェリー著の「フランケンシュタイン」(1831) においては、主人公のフラン

ケンシュタイン博士に創られたモンスターは、誰にも自分のことを理解されずに、自分を作った博士に対して自らの思いを吐露する。「俺はいったい誰なのだ？」と。この叫びはまさに、アイデンティティ危機の葛藤の発露であるといえる。

この小説の中でモンスターは、ゲーテの「若きウェルテルの悩み」を読み、主人公に痛く共感する。しかし、主人公と自分との違いに気づく。自分はこの世に誰ともつながりがないことを。そして、「俺はいったい誰だ？いったい何者だ？どこから来た？俺の運命は何だろうか？とこのような問いが繰り返し、心の中を巡り、しかし、解決されることはなかった」と語る（Who was I? What was I? Whence did I come? What was my destination? These questions continually recurred, but I was unable to solve them.）。

そして、自分を作った博士に対する復讐を止める条件として、自分と同じ女性のモンスターを作って欲しいと懇願する。彼女と二人で、自分は人里離れたところに住み、誰にも迷惑をかけないと誓う。いったんは、博士はこの約束を果たそうとするが、完成しかけた女性のモンスターを前にして、途中でやめてしまう。このため、モンスターは絶望しさらに復讐に駆り立てられる。

モンスターは、アイデンティティ危機を克服す

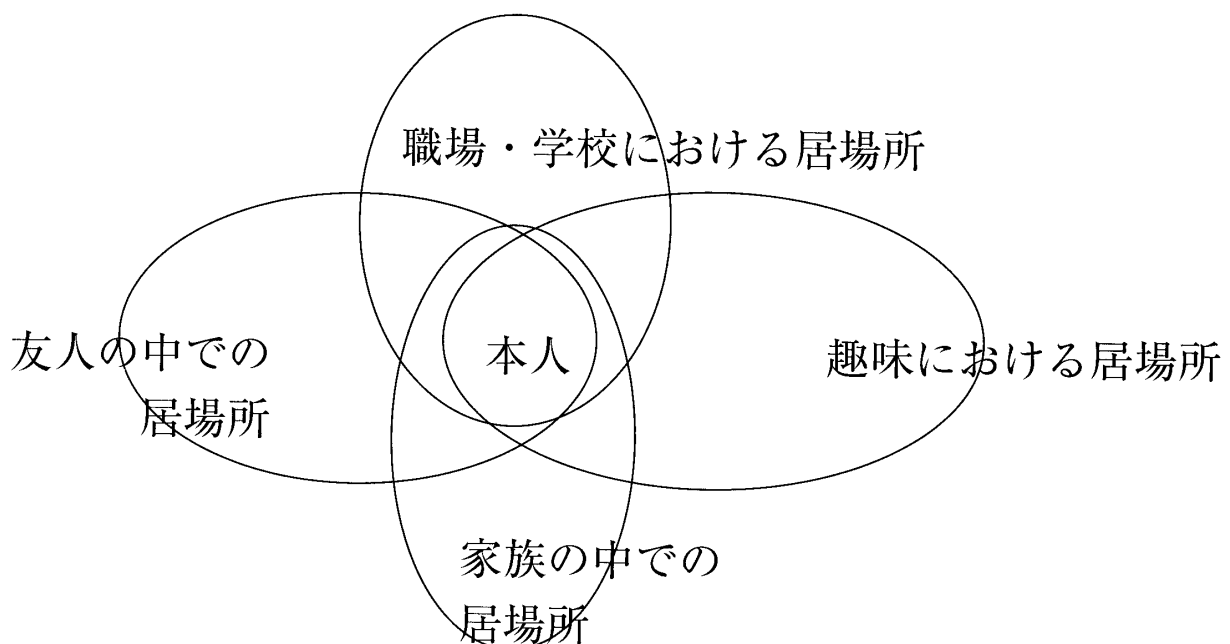


図3. 居場所の例示

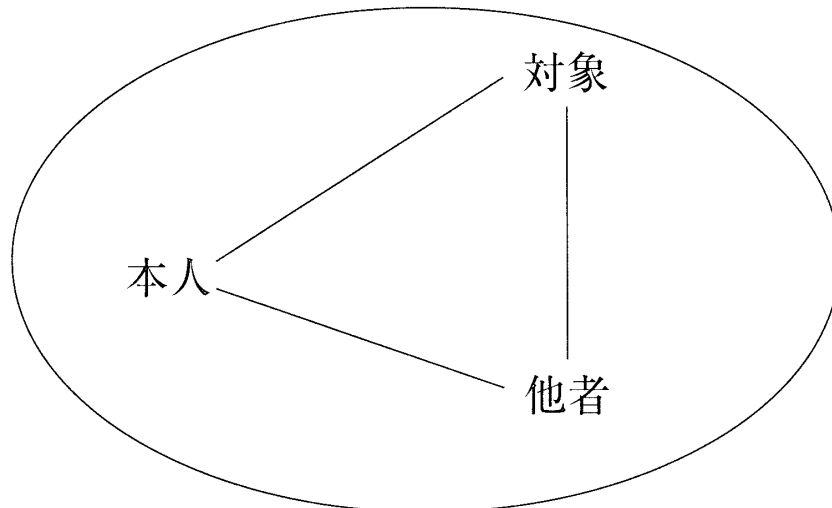


図4. 居場所のトライアングル

るために、自分を認め共に生きる他者を欲していたと言える。それは、言い換えれば、自分を認めてくれる他者のいる居場所を欲していたのである。筆者は以前、映画「ブレードランナー」から人造人間のレプリカントが自らの過去を、そして未来を得ようとしたことを、物語として捉え、それは人間も同様だと考察した(小沢, 1992)。このモンスターのアイデンティティ危機の叫びと、居場所を求める試みは、人間も同様ではないかと、多分に心情的ではあるが、考えさせられる。

#### 4. まとめと課題

##### (1) 具体的研究の目的の明確化

居場所における具体的な研究において、いかなることを明らかにするか。まず、個人のもつすべての居場所の全体図を描くことである。そして、個々の居場所をトライアングルを基本形として描くことである。この2種類の個人における居場所の図は、モレノのソシオグラムに対して、「居場所グラム」と名付けることが出来る(小沢, 2000)。そして、この居場所グラムを描くことによって、その個人がいかにして、居場所から、アイデンティティ、つまり、自分が自分であることを確認し、納得しようとしているのかを明らかにする糸口をつかむことが出来ると考えられる。

##### (2) 自己理解および自己把握から考える

本論で見たように、アイデンティティを自分が

自分であることと捉えると、アイデンティティを得るもしくは確認するとは、自分が自分であることを確認し、この自分でよしと思うことであるといえる。これは、まさに、自己把握である。それは、何によってなされるか。そのひとつは、居場所を得ることである。「これこそは!」という居場所を探し得ること、そのことによって、自らのアイデンティティは確認され、自己把握がなされると考えられる。第2章で見たように、人は、常に変化にさらされる青年期において、また、青年期だけでなく生涯にわたり変化を受けの中で、アイデンティティを得ることもまた、常に危機にさらされ続ける。結局は、自己把握を目指し続けるという言い方になるだろう。

では、アイデンティティにおける自己理解とは、自分についての何を理解することなのか。それは、生活から分離し孤立した自分を知ることはない。自分が生き生きと出来る居場所とはどこかを、生活を通して実感することだろう。そして、居場所を対象と他者に分けたことから、居場所の問題は、次の二つの問いに集約できる。ひとつは、自分は何をどうして生きていくか?であり、もうひとつは、自分は誰とどう生きていくかである。第一の問いは、ただ一つの答えで答えられるものではなく、職業から、趣味まで生活の中の「対象」の意味と重要性には様々なものがあるだろう。第二の問いもただひとつの答ではなく、家族、友人、仲間、同僚、学校および職場の人間関係から、様々

な自分を取り巻く他者が含まれるものであると考  
えられる。このように、様々な「対象」に「どう」  
打ち込み、様々な「他者」と「どう」接しつきあ  
うのかを、多くの葛藤をもちつつ明らかにしてい  
くことが自己理解であると考えられる。

### (3) 具体的研究における問題

人は、ある領域、例えば、友人や異性との関係  
の中に、または、将来の職業や趣味に居場所を求  
めたり、逆に、今持つてゐる自分の居場所を再考し  
たり、様々な選択が行われているだろう。さら  
には、卒業などの不可抗力で、今いる自分の居場所  
を失ってしまうこともあるだろう。このように、  
生活することのひとつの側面は、言い換えると、  
居場所を捨て、失い、捉え直し、探し、得るとい  
う活動であるということが出来る。さらに、ひと  
つの居場所における葛藤が、大きくなれば、その  
影響は、全体の居場所にまで波及するだろう。そ  
して、そこまで大きな問題となるならば、人は自  
らを振り返り自分自身を見つめることになるだろ  
う。まさに、自分がこうして生きている自分であ  
ることが、問われるのである。

次に、研究場面の問題としては、先に示したよ  
うに、まず、このような居場所をめぐる個人の様  
相から、いかにして一般的に共通するものを抽出  
することが出来るかがある。個人によって、居場  
所の全体像も異なるだろうし、個々の居場所のト  
ライアングルも異なるだろう。そこから、いかな  
る共通性のあるものを見出せるか。さらに、どの  
ように、居場所から自らのアイデンティティを確  
認するかも、個人によって様々な方法があるだろ  
う。そこからも、一般的なものを抽出することが  
出来るだろうか問題となる。

本論でみたアイデンティティと居場所という概  
念は、自らを知り捉えるためのものであり、自ら  
と居場所を共有した他者に対して、とかく自らの  
葛藤に巻きこんでしまいつつも、その他者が生き  
生きと生きるために何が出来るかを考えるため  
のものである。難問は山積しているが、本論にお  
けるアイデンティティの捉え方と居場所という見  
方は、人が自らの生活から自らを振り返る方向を示

すという点でアイデンティティ研究のさらなる展  
開の可能性をもつものであると考えられる。

### 引用文献

- Erikson, E.H. 1959 Psychological Issues : Identity and  
the Life Cycle. International Universities Press. (小  
此木啓吾訳編 1973 自我同一性—アイデンティティ  
とライフサイクル—誠信書房)
- Erikson, E.H. 1968 Identity: Youth and Crisis. W.W.  
Norton. (岩瀬庸理訳 1982 金沢文庫)
- Erikson, E.H., Erikson, J.M. & Kivnick, H.Q. 1986  
Vital Involvement in Old Age (朝長正徳・朝長梨枝  
子訳 1990 老年期 みすず書房)
- James, W. 1950 The principles of psychology (今田  
恵訳 1995 心理学の原理 岩波書店)
- 西平 直喜 1970 青年心理学方法論序説 平安書院
- 西平 直喜 1996 生育史心理学序説 金子書房
- 西平 直喜 1999 女性の生涯発達心理・歴史的考察—  
伝記資料による女性のライフサイクルの分析 岡本祐  
子編著 女性の生涯発達とアイデンティティ 北大路  
書房
- 西平 直 1993 エリクソンの人間学 東京大学出版
- 大村 政男 1990 血液型と性格 福村出版
- 小此木啓吾 1978 モラトリアム人間の時代 中央公論社
- 小沢 一仁 1992 人それぞれが創る物語 山添正編著  
現代日本の子どものエコロジー プレーン出版
- 小沢 一仁 1994 a 心理学のパラダイムからみたアイデ  
ンティティ・モデルの模索 帝京学園短期大学研究紀  
要 第6号
- 小沢 一仁 1996 a アイデンティティを居場所と物語と  
して捉え直す概念的試み 日本発達心理学会第7回大  
会学会発表 論文集
- 小沢 一仁 1996 b 現象学的アプローチを用いた青年の  
自己理解のための対話的研究の模索 帝京学園短期大  
学研究紀要 第8号
- 小沢 一仁 1996 c 自己理解のためのアイデンティティ  
概念の捉え直しの試み 東京工芸大学工学部研究紀要  
第10号
- 小沢 一仁 1997 自己理解とアイデンティティ 東京工  
芸大学工学部 研究紀要第11号
- 小沢 一仁 1998 青年期のアイデンティティにまつわる  
問題の起点 東京工芸大学工学部研究紀要第12号
- 小沢 一仁 2000 居場所グラムによる青年期のアイデ  
ンティティの解明 日本教育心理学会第42回大会論文  
集
- 佐伯 胖 1986 教育心理学研究を面白くするには 教育  
心理学年報

- Shery.M 1831 Frankenstein London 3rd ed (訳  
1970 フランケンシュタイン 創元社文庫)
- 落合 良行 1993 青年の理解 青年の心理学 ミネルバ  
書房
- 落合 良行 1994 青年心理研究における3方法:「観る」  
「確かめる」「伝える」青年心理学研究第6号
- やまだ ようこ 1976 モデル構成をめざす現場心理学の  
方法論 愛知淑徳短期大学 紀要第25号